

アガサ・クリスティーと戦争

——「三匹の盲目のねずみ」と『ねずみとり』に描かれた時代の精神——

香山はるの

アガサ・クリスティー (Agatha Christie, 1890-1976) は、一般にイギリスのカントリー・ハウスを舞台にした事件を書いた作家と捉えられることが多い。一言で言えば、古きよき時代のイギリスの中、上流階級の社会をノスタルジックに描いた保守的な作家というイメージである。この意味で、クリスティーのミステリーは閉鎖的な狭い世界を扱っていると批判する声もこれまでであった。たとえば、自身もミステリー作品を書いたレイモンド・チャンドラー (Raymond Chandler, 1888-1959) は、「簡単な殺人の方法」というエッセイの中で、イギリスのいわゆるミステリーの黄金期を築いた作家たちの「非現実的な小説」(193)を批判している。チャンドラーが A. A. ミルン (A. A. Milne, 1882-1956) やドロシー・L・セイヤーズ (Dorothy L. Sayers, 1893-1957)、クリスティーらのミステリーに落胆したのは、端的に言う、彼らが世の中の動きを見ていないからだという。チャンドラーの表現を借りるならば、こうした黄金期の作家は社会の変化から何ら影響を受けず、「自分のことだけにかまけて、自分で自分の問題を解き、自分の質問に答える」だけであった (“The Simple Art of Murder,” 181-82)。しかし、このようなチャンドラーの批判は必ずしも真実とは言えないように思われる。たとえば、クリスティーに関して言えば、クリスティーは二つの世界大戦を経験しており、その経験は彼女の作品にも反映されている。クリスティーはしばしば田舎の小さな村を物語の舞台としたが、1920年代に発表された初期の小説におけるスタイルズ・セント・メアリー村やキングズ・アボット村など一見平穏な村の世界にも、戦争は影を落としている。さらに、第二次世界大戦後、特に1940年代末から50年代前半の作品では、戦争が人々の心に残した深い傷跡がより鮮明に描き出されている。本稿では、クリスティーと戦争という観点から、1950年に刊行された短編「三匹の盲目のねずみ」 (“Three Blind Mice”) と、それを基にした戯曲『ねずみとり』 (*The Mousetrap*, 1952) を中心に取り上げ、考察する⁽¹⁾。

まずは、第一次世界大戦、第二次世界大戦におけるクリスティー自身の経験

について見ていきたい。二つの世界大戦は、明らかにクリスティーの人生に影響を与えた。1912年、22歳のアガサ・ミラー（旧姓）はダンスパーティで英国航空隊所属のアーチボルド・クリスティーと出会った。二人は婚約するが、やがて第一次世界大戦が勃発し、アーチボルドは直ちに動員された。そして、アーチボルドがクリスマスの短い休暇で帰国した際、二人は慌ただしく結婚式を挙げた。夫がフランスで従軍中、クリスティーはトーキーの陸軍病院でボランティアの看護婦として働いた。その後病院から薬局勤務に移ったとき、かねてから関心のあった探偵小説を書こうと思い立ち、ダートムアのホテルに2週間滞在して執筆に専念した。この時書き上げたのが『スタイルズ荘の怪事件』（*The Mysterious Affair at Styles*, 1920年刊行）であった。ミステリー作家アガサ・クリスティーのデビュー作である。当時のイギリスにはベルギー人の戦争難民が大勢いた。クリスティーはそうした状況から着想を得て、ベルギー人の探偵、エルキュール・ポアロのキャラクターを創造した（*Autobiography*, 256）。そして、ポアロの相棒として考案したのが、傷病兵としてイギリスに送還されたヘイスティングズ大尉である。小説の第一章で、スタイルズ・セント・メアリー村を訪れたヘイスティングズはのどかな田舎の風景を眺めながら、今起こっている戦争とは「別世界」(3)に迷いこんだかのように感じる。しかし、そうした幻想はスタイルズ荘の女主人、エミリー・イングルソープの次のような言葉で破られる。「戦時下ですからね。なにひとつ無駄にはしていません。古紙一枚だって捨てないで、袋につめて供出しているのですよ」(9)。

ジュリアス・グリーン（Julius Green）が指摘するように、第二次世界大戦はクリスティーの生活に第一次大戦以上に大きな影響を与えた（“A Worrying, Nerve-Wracked World,” 96）。アーチボルドとの最初の結婚が10数年で破綻した後、クリスティーは考古学者のマックス・マローワンと再婚して、1939年には憧れていた「夢の家」（*Autobiography*, 480）、グリーンウェイ・ハウスを購入する。しかし、喜びも束の間、まもなく第二次世界大戦が始まった。グリーンウェイ・ハウスは、ロンドンから疎開してくる子供たちの託児所として貸し出され、その後海軍省に接収された。こうして、クリスティーはマックスとロンドン市内のシェフィールド・テラス48番地に移ったのであるが、1940年にはその地下室が爆撃を受けた。ロンドン大空襲（the Blitz）である。幸いクリスティーもマックスも家にいなかったため、無事であった。その後、空軍省に入ったマックスはカイロに派遣されたが、クリスティーはイギリスに残って、病院の薬局に勤めながら執筆を続けた。クリスティーは、自分は空想の世界を持っ

ていたおかげで戦争中も執筆は困難でなかったと述べているが (*Autobiography*, 489)、この頃の彼女の旺盛な執筆活動を考えると、むしろ書くことによって自分を支えてきたのではないかと思われる。ルーシー・ワースリー (Lucy Worsley) をはじめとする何人かの批評家が示唆しているように、マックスと離れて戦時下のロンドンで生活していたクリスティーは、孤独で精神的にかなり不安定になっていた (243-44)。クリスティーは、『自伝』 (*An Autobiography*, 1977) の中で、つらい経験を感情を露わにして語ることはあまりないのだが、淡々と綴られた言葉からもこの時期の悲痛な思いはうかがえる。

まもなく自分自身が死んでしまうかもしれない、最愛の人が死んでしまうかもしれない、友人が亡くなったと聞かされるだろう—こうした覚悟をするのが実際当然のことになってきていた。割れた窓、爆弾、地雷、そしてやがて飛行爆弾やロケット—こうしたものがすべて、異常なことではなく、全く当たり前のこととして続いていた。3年も戦争が続くと、日常の出来事になっていた。戦争が終わりになるときがいつか来るとは本当に想像もできなかった。(489)

1943年には一人娘、ロザリンドの夫が戦死した。クリスティーは自身の死についても考えるようになり、『カーテン』 (*Curtain: Poirot's Last Case*, 1975) と『スリーピング・マラーダー』 (*Sleeping Murder*, 1976) を執筆して、ロザリンドとマックスにそれぞれ印税を贈り、版元と死後出版の契約を結んだ。

第二次世界大戦中、クリスティーは自分でも「信じられないほど」たくさん的小説を書いた (*Autobiography*, 509)。たとえば、長編小説では『杉の柩』 (*Sad Cypress*, 1940)、『愛国殺人』 (*One, Two, Buckle My Shoe*, 1940)、『白昼の悪魔』 (*Evil Under the Sun*, 1941)、『NかMか』 (*N or M?*, 1941) 『書斎の死体』 (*The Body in the Library*, 1942)、『五匹の子豚』 (*Five Little Pigs*, 1942)、『動く指』 (*The Moving Finger*, 1943)、『ゼロ時間へ』 (*Towards Zero*, 1944)、『死が最後にやってくる』 (*Death Comes as the End*, 1945)、『忘れられぬ死』 (*Sparkling Cyanide*, 1945) など10作品を執筆した。トミーとタペンスが活躍するスパイ小説の『NかMか』は別として、これらの作品では戦争は全面に出てこない。戦争の真っ只中で不安と恐怖に満ちた日々を送っていた読者は、過酷な現実を忘れさせるような娯楽的作品を求めていることをクリスティーは理解していた。また、出版社からも内容が重苦しくない、気軽に読めるような小説を要請され

ており、激しい暴力や戦闘を生々しく描いた作品を書くことは実際難しかった (Mills, "Detecting the Blitz," 141)。事実戦時中にも拘わらず、クリスティーの本はよく読まれた。たとえば、『五匹の子豚』は回想の事件を扱った比較的軽快な作品であるが、初版の売り上げは二万部に達した (Walter, 8)。1934年の『三幕の殺人』(*Three Act Tragedy*) が一万部だったことを考えると、売れ行きは倍増しているのである (Walter, 8)。

実際クリスティー、そして彼女の読者が戦争の体験、記憶に向き合えるようになったのは、戦後しばらくしてから—1940年代の終わり頃—であろう。たとえば、40年代後半から50年代前半のクリスティーの作品には、戦争で心の傷を負った人が多く登場する。また、戦時中の小説では抑制されていたクリスティー自身のトラウマも、『満潮に乗って』(*Taken at the Flood*, 1948) など40年代後半以降の作品に顕著に表れていると言う批評家もいる (Rebecca Mills, "Detecting the Blitz," 141)。

1948年の『満潮に乗って』は、空襲警報下にあるコロネーション・クラブの描写から始まる。物語全体を重苦しく覆っているのは、戦争による心の荒廃である。「これが戦争が残していったものなのだ。悪意。敵意。それが至る所に蔓延している」(49)。「戦争がもたらした本当の怖さは、肉体的なものではなかった—海に仕掛けられた水雷や空から降ってくる爆弾、荒野を走る車にピューンと撃ち込まれるライフル弾とか、そうした肉体的な危険ではない。考えることをやめればずっと楽に生きていかれるとわかる、精神的な危機なのだ」(112)。また、1950年の『予告殺人』(*A Murder is Announced*) には中部ヨーロッパ出身の難民の女性、ミッチが登場する。家族を虐殺され、必死の思いでイギリスに逃れてきた彼女は、自分はその中でも迫害されるのではないかという不安、捕われて殺されるのではないかという妄想に取り憑かれている。一方、ミッチがメイドとして働いているリトル・パドックスの人々は必ずしも彼女を理解し、温かく受け入れているわけではない。彼らにとって、ミッチは戦争の恐怖を甦らせ、自分たちが取り戻しつつある平穏な日常を脅かす存在だからである (Yiannitsaros, 132-33)。さらに、こうした戦後の社会に生きる様々な人々—戦争中に愛する者を失い、胸の張り裂ける思いをした人たち、激しい悲しみや怒りにとらわれ、心を病んだ人たち、つらい経験を乗り越えて、もがきながらも前に進もうとする人たち—が最も鮮やかに描かれているのは、「三匹の盲目のねずみ」と『ねずみとり』ではないか。

「三匹の盲目のねずみ」は、1947年にクリスティーが80歳を迎えるメアリー

皇太后のために書いたラジオ劇である。執筆のいきさつについては、グウェン・ロビンス (Gwen Robyns) の『アガサ・クリスティーの謎』(*The Mystery of Agatha Christie*) に詳しいが、当時祝賀番組を企画していた英国放送協会 (BBC) は、皇太后がどういったものを望まれるか打診をした。そして、皇太后がクリスティーのファンであることがわかると、早速クリスティーに30分のラジオ劇の執筆を依頼した。クリスティーはこれに応じて、一週間で「三匹の盲目のねずみ」を書き上げたという (177-78)⁽²⁾。その後「三匹の盲目のねずみ」は短編に形を変え、1950年にはこれを表題とした短編集 (*Three Blind Mice and Other Stories*) がアメリカで出版されて大成功を収めた (Morgan, 262, 291)。そして、その翌年クリスティーはさらにこれを戯曲化した。「三匹の盲目のねずみ」は1952年ノッティンガムのシアター・ロイヤルで初演を迎え、後にロンドンのアンバサダー劇場で上演された (Green, *Agatha Christie*, 319-320, 564)。ちなみに、公演中に同名の戯曲が既にあることが判明したため、途中で「ねずみとり」と改題されたという (Robyns, 179-180)。

ジャネット・モーガン (Janet Morgan) をはじめとする批評家が指摘するように、クリスティーが実在の事件からヒントを得てこの劇を書いたことは重要である (262)。1945年にシュロプシャーの農場で虐待された子供が死亡するという衝撃的な事件があった。この事件で亡くなった少年の弟、テレンス・オニール (Terence O'Neill) が、およそ65年後に『誰か僕たちを愛して』(*Someone to Love Us*, 2010) という回想録を出版して、話題になった。以下オニールの本を基に事件の概要を説明する。

ニューポートに暮らすオニール家の3人兄弟—デニス、テレンス (通称テリー)、フレディーは、幼い頃から施設や里親の家を転々としていた。当時父親は従軍中で、貧しい生活の中、母親は8人の子供の養育に苦勞していた。3人の兄弟は1939年からいくつかの施設や家庭に預けられてきたが、1944年にデニスとテリーはシュロプシャーで農場を営むゴフ夫妻に里子に出された⁽³⁾。当時デニスは11歳、テリーは9歳であった。最初の数日は大きな問題もなく過ぎたが、まもなくゴフ夫妻は子供たちを虐待し始め、農場の経営が苦しくなると、彼らの残忍さは激しさを増していった。たとえば、夫妻はデニスとテリーにごくわずかな食事や粗末な衣服しか与えなかった。さらに、何かと理由を見つけては二人に厳しい叱責、殴打や鞭打ち等の体罰を与えるようになったのである。少年たちは常に空腹で痩せ細り、健康状態は悪化していった。特にデニスは衰弱が著しかった。1945年1月のある晩、ゴフ氏から激しい暴力を

受けたデニスは就寝中に息を引き取った。デニスの死によって過酷な実態が露見し、ゴフ夫妻は虐待の容疑で逮捕された。施設に保護されたテリーは裁判が始まると出廷して、農場で兄と自分はどのような生活をしてきたか、里親からどのように扱われていたか、デニスが亡くなる前夜ゴフ氏からどのような暴力を受けたか等を証言した。裁判の結果ゴフ氏は故殺罪で懲役6年、夫人は児童虐待（育児放棄）の罪で6ヶ月の判決を受けた。この事件はイギリス中を震撼させた。既に述べたように、クリスティーは自宅を疎開児童のために提供していた経験もあり、この話を切実な問題として捉え、心を痛めた (Morgan, 262)。こうして、オニール兄弟の事件は、「三匹の盲目のねずみ」と『ねずみとり』に結実した。いずれの作品も、戦争中農場に預けられた3人の兄弟がひどい虐待を受け、末の子が命を落とした事件を背景にしており、大人になったその少年の兄が事件の関係者に復讐をしていく話である。グリーンが論じているように、これらの作品が戦時期に不安な気持ちを抱きながら、我が子を疎開させて他人の手に託した多くの親の記憶を喚起したことは想像に難くない (Agatha Christie, 305)。また、マザーグースの「三匹の盲目のねずみ」のメロディーが奏でられる中、突然灯りが消えて暗闇の中で殺人が行われる場面では、人々は戦争中の灯火管制 (“blackout”) を思い出したかもしれない。ロジャー・ダルリンプル (Roger Dalrymple) が論じている通り、第二次世界大戦中イギリスでは夜間の空襲等に備えて灯火管制が敷かれたが、それによって事故や、窃盗や殺人などの犯罪も増加したという (156-57)。すなわち、当時の人々の意識の中で、暗闇は二重の意味で「危険」や「生命に対する脅威」と結びついていたのである。

1950年の短編、「三匹の盲目のねずみ」とその後『ねずみとり』として上演された戯曲には幾つか異なる点、すなわちクリスティーが改変した点がある。ここで主要な変更点について指摘しておきたい。第一に、キャラクターの名前の変更である。『ねずみとり』では、パークシャーのゲストハウス「モンクスウェル・マナー」を営むモリーとジャイルズのファミリー・ネームが、デイヴィスからロールストーンに変わったことに加え、そのゲストハウスに警察官を装って乗り込んでくる殺人犯の青年の名がジムからジョージに変更されている。次に、『ねずみとり』では新たなキャラクターが一人加わっている。どちらの作品でもロングリッジ農場に預けられた子供は男の子2人と女の子1人、合わせて3人という設定になっているが、「三匹の盲目のねずみ」では女の子に関する記述はごくわずかで、この子がロングリッジ農場を出てからどういう人生を送っ

たのか詳しく書かれていない。一方、『ねずみとり』では、事件の後、養女に出されて外国で育ったかつての少女がミス・ケースウェルという名前で登場する。ケースウェルは現在 24 歳。生き残ったもう一人の弟を探すために 11 年ぶりにイギリスに戻ってきたという。第三の相違点は、3 人の子供の関係や彼らが里子に出されたときの状況が微妙に違うことである。「三匹の盲目のねずみ」では、子供たちは上から男(15 歳)—女(14 歳)—男(13 歳)であり、学童疎開でロングリッジ農場にあずけられたという設定になっている。子どもたちの母親は既に亡くなっており、父親は海外で軍務に就いていた。一方、『ねずみとり』では、3 人の子供は一番上が女の子で、その下に男の子が二人いる。父親は軍人として外地に勤務していたが、母親がアルコール中毒で子供の養育が困難であったため、子供たちは里子に出された。最後に、モリーのキャラクターに関しても若干変更がある。「三匹の盲目のねずみ」にせよ『ねずみとり』にせよ、殺害されるのは子供たちを虐待した農場主の妻と、当時その地域で児童の受け入れ先の斡旋をしていたボイル夫人である⁽⁴⁾。一方、間一髪のところでも 3 人目の犠牲者になるのを免れたモリーと事件との関わりについては、二作品で相違がある⁽⁵⁾。すなわち「三匹の盲目のねずみ」では、モリーは虐待された少年が死ぬ直前に手紙で助けを求めた教師の妹ということになっているが、『ねずみとり』ではモリー自身がこの教師—子供に助けを求められたにも拘わらず、その子を救えなかった教師—という設定になっている。一言で言えば、クリスティーは『ねずみとり』でモリーが負う責任をより重くし、彼女の心の葛藤をより深刻な問題として描いているのである。

いずれの作品においても、戦後 1940 年代末から 50 年代前半のイギリスが舞台になっている。「三匹の盲目のねずみ」では、ロングリッジ農場の事件が起きたのは 1940 年であると明記されているため、描かれているのはその 8 年後—すなわち 1948 年頃—の話であると推定できる。実際モリーとジャイルズの会話にも、配給帳⁽⁶⁾や缶詰の買い置き、やみ市場等の話題が見られる。戯曲『ねずみとり』について言えば、「三匹の盲目のねずみ」に比べると配給等に関する言及は少ないが、この劇の初演が 1952 年であったことを考えても、二つの作品はほぼ同じ時代を描いていると言えるであろう。既に示唆したようにクリスティーの多くの作品には、田舎の邸宅に暮らす比較的裕福な人たちが描かれている。先に触れた『スタイルズ荘の怪事件』(1920)もその一例である。スタイルズ荘の女主人、イングルソープ夫人は慈善バザーを主催したり、ポアロのような戦争難民を支援するなど、村のコミュニティーで主導的な役割を果た

していた。それからおよそ30年後に書かれた「三匹の盲目のねずみ」／『ねずみとり』では、状況が全く異なる。若夫婦のモリーとジャイルズは叔母からマナー・ハウスを相続するが、お金のない二人はその家で安楽な生活を送ることはできない。そこで彼らはその家でゲストハウスの経営を始めたのだが、使用人を十分に雇えないので、料理や掃除から宿泊客の荷物運びに至るまで全部自分たちでやらなければならない。こうした点に、二つの世界大戦を経験したミドルクラスの暮らしの変化が反映されている（Green, “A Worrying, Nerve-Wracked World,” 102）。

そして、このモンクスウェル・マナーに集まった人々の多くが、戦争で深い心の傷を負っていることが次第に明らかになる。たとえば、モリーはパイロットであった最初の婚約者を戦争で失っている。また、トロッター部長刑事に扮するジム／ジョージや、一見軽薄な若者、クリストファー・レンは心を病んだ脱走兵である。前者については、軍の医師が精神に異常をきたしていると証言しており、後者については空爆で最愛の母親を失ったショックで精神が不安定になったという。二人の青年はいわば「成長が止った子供」という点で共通している。

クリスティーは、過去のある時点で人生が実質的に止ってしまった人々に深い関心を示している。たとえば、『葬儀を終えて』（*After the Funeral*, 1953）のミス・ギルクリストである。ギルクリストは、亡くなったコーラ・ランスクネと同居していた50歳前後の家事手伝いの女性である。料理上手なギルクリストはかつて喫茶店を経営していたが、戦争が始まると菓子作りに必要な材料が手に入らなくなったため、閉店を余儀なくされた。それ以来彼女はあの喫茶店のことを忘れられず、自分の店をまた持つという夢に取り憑かれていた。そして、その資金を得るためにコーラを殺害したのである。ある意味で、ミス・ギルクリストは加害者であると同時に、戦争によって人生を分断された被害者であるとも考えられる。たとえば、4章で彼女は、自分が失った喫茶店のことを「戦争の犠牲者」（“a war casualty” 43）と呼んでいる。ミルズによれば、ギルクリストは第一次世界大戦によって、婚期を逃してしまったいわゆる「余った女」と考えられる（“England’s Pockets,” 36）。そして、次の世界大戦で、ギルクリストは自分のすべてを注ぎ込んだ店を失い、他人の使用人になることで、独立した生活とミドルクラスとしてのプライドを失ったのである。小説の最終章には、刑務所に収監されたギルクリストに関する短い記述があるが、戦争で零落した「オールド・ミス」の女が狂気に陥る姿には哀感が漂う。「彼女は喫茶店

のチェーン店を展開する計画をあれこれと入念に練って一日の大半を過ごしています。一番新しい店は〈ライラックの茂み〉という名前で、クローマーの町で開くのだそうです」(303)。

『三匹の盲目のねずみ』／『ねずみとり』の多くのキャラクターもまた「忘れられない思い出」を抱えている（「私は忘れないな」／「人には忘れられないことがあるはずだ」／「私は、忘れたかった—忘れたかったのです」[*Mousetrap*, 308, 355, 362]）。たとえば、ジム／ジョージは、弟の死に対する深い悲しみとその死を引き起こした者への怒りから抜け出すことができない。クリストファーは、いじめられていた子供時代の思い出や母親の死による喪失感に苛まれている。モリーも、救えなかった子供のことを思い出しては罪悪感にかられる。さらに、『ねずみとり』に登場するミス・ケースウェルについても、ロングリッジ農場で過ごした忌まわしい日々「寝室の水差しに張った氷、血が出てひりひり痛む霜やけ—たった一枚の薄くてボロボロの毛布—寒さと怖さで震えている子供」(*Mousetrap*, 308) —の記憶を振りはらうことができない。彼らは皆、自身の苦しい体験については口を閉ざし、心の傷を隠そうとする。

ニコラス・バーンズとマーガレット・バーンズ (Nicholas and Margaret Birns) らの批評家が、クリスティーの作品におけるキャラクターの「二面性」(123) に注目しているのは興味深い。たとえば、クリスティーのキャラクターはしばしば本当の自分を隠して、違うタイプの人間を演じることがある。「三匹の盲目のねずみ」／『ねずみとり』においても、これは顕著に見られる。モリーとジャイルズのゲストハウスに宿泊する人々は皆、名前や年齢、経歴など何かを偽っている。ジム／ジョージが警官と称してゲストハウスに乗り込んできたことは既に述べたが、自称「クリストファー・レン」も自分が建築家の卵であるかのように振る舞い、ミス・ケースウェルについてはロングリッジ農場の話題が出て、自分がかつてそこに送られた子供であったことは隠していた。外国人のパラピチーニに至っては、「やみ屋」ではないかと周囲に疑われるものの、最後まで国籍や年齢、職業等は不明のままである。加えて、ボイル夫人、そしてモリー自身も、当初はロングリッジ農場の事件について無関係を装った。

クリスティーはしばしばこうしたアイデンティティーの偽装や隠蔽を、戦争がもたらした社会の混乱や変化と結びつけて捉えている。たとえば、『予告殺人』(1950) の10章でミス・マーブルは次のように言っている。

それに、戦争があってから、世の中はすっかり変わりましたでしょう。たとえばこのチッピング・クレグホーンです。私が住んでいるセント・メアリー・ミード村とそっくりなんです……15年前でしたら村の人全員を知っていました。大きな屋敷のバントリー家、ハートネル家、プライス・リドリ一家にウェザビー家……その人たちの両親やそのまた両親、それから叔父さんや叔母さんもずっとそこに住んでいたのです。誰か新しく引越してくる人がいても、紹介状を持っているとか、前からそこに住んでいる人と同じ連隊にいたとか、同じ船に乗っていたとか、そういう具合でした……でも、もうそういう時代ではありません。どの村も、どの小さな田舎町も、特に縁がないのにやって来て住みついた人でいっぱいですからね……よそから人が来る—その人たちについてわかっているのは、本人がこうだと言っていることだけなのです。(132-33)

ミス・マーブルの話を知っていたダーモット・クラドック警部も、この言葉に同感した。彼は配給帳や、写真や指紋のついていない身分証明書でしか人を確認できない戦後の社会には、「偽りの身分で、国を渡り歩く連中」がいることを職業柄「嫌と言うほど知っていた」(134)。実際『予告殺人』には、資産家の遺産の相続を企んで、死亡した姉になりすましたシャーロット・ブラックロックの犯罪が興味深く描かれている。

「三匹の盲目のねずみ」と『ねずみとり』に関して言えば、クリスティーは、人は最も身近にいる者のことさえ理解していないかもしれないという不安を描き出している。たとえば、モリーはジム／ジョージが扮するトロッター部長刑事に巧みに誘導され、自分は夫ジャイルズについて何も知らないのではないかと疑念を抱き始める。モリーは、当時の多くの若者と同様、戦争が引き起こした混乱の中で、ジャイルズと出会ってからわずか数週間で慌ただしく結婚したのであった。

あの部長刑事が何を考えているのかわからないけれど、人について色々なことを考えさせるわね。自分の心に聞いてみると、疑わしく思えてくる。自分が愛する人、よく知っている人だ—ただの他人じゃないかと……親しい人たちに囲まれていると思っていたけれど、その人たちの顔をふと見たら—思っていたのとは違う人ばかりで—親しいふりをしていただけなのだ。たぶん、人を信じてはいけな—所詮は皆ただの他人なんだ

から。(Mousetrap, 342)

このように、「三匹の盲目のねずみ」と『ねずみとり』には1950年前後の「不安で気が狂いそうな世の中」(“a worrying nerve-racked world,” *Three Blind Mice*, 44)に生きた人々の精神が映し出されている。学童疎開、配給帳、空爆、脱走兵、病んだ心、失われていく人と人との確かなつながり等、作中にまざまざと描き出される世界に、当時の人々は共感を覚えたのではないか。この意味で、クリスティーは世の中の動きに向き合っていないというチャンドラーの批判は、真実とは言い難い。作品が生まれた背景に、実在の悲惨な事件があったことは既に述べたが、里親の虐待で兄をなくしたテレンス・オニールが、回想録の中でクリスティーの『ねずみとり』に触れているのは興味深い。「あれは私自身の話だ。大人になった私が、子供時代に起きたことに復讐しようとしてきた話なのだ」(308)。

『ねずみとり』の劇が、新型コロナ・ウィルスの流行により2020年に中断したとはいえ、1952年から70年もの間ロングラン公演を続けてきたことは特筆に値する。既に示唆したように、この作品がヒットした一つの理由は、鮮やかに描き出された戦後の人々の姿に、多くの人が自分自身の人生を見出したことにある。また、モリーが抱くような不安—他者を知ることの難しさや限界—は、現代にも通じる問題であろう。そして、このような深刻なテーマを扱っているにも拘わらず、作品の結末には、ある種の明るさ、或いは「救い」が認められることも意義深い。クリスティーは『自伝』の後半、「第二次世界大戦」において、戦争は何も解決せず、悲惨な結果しかもたらさないと書いているが、それと同時に、未来に対する希望をなくしてはいけないと訴えている。「とにかく私たちは希望を持つことができる……私たちはあまりにもすぐに絶望して、こう言いたがる。〈何をしたところでどうなるというのか?〉希望は今日、この時代に、最も育まれなければならない美德である」(503)。

「三匹の盲目のねずみ」と『ねずみとり』のエンディングでは、降り積もった雪が解け出し、ゲストハウスの孤立した状態がまもなく解消されることが示唆される。言うまでもなく、最も重要な点は殺人犯が判明したことである。ダールンブルが示唆するように、戦時中はロンドン大空襲など、顔の見えない多くの敵から攻撃されるという恐怖があった。一方、ミステリーの世界では、ジム／ジョージという一人の人間が犯人として特定され、「安全な場所」に保護される(165)。それは、当時の読者や観客に安心感をもたらしたであろう。

心を病んだ犯人のジム／ジョージは幼い子供に戻ってしまうが、モリーやジャイルズ、ミス・ケースウェルら若者たちは、未来に向けて一步を踏み出すことができるかもしれない。そうした期待を読者や観客は抱くのである。特に二人の女性—モリーとケースウェル—が、傷ついた心を抱えながらも過去と決別して強く生きようとする姿勢は、時代を超えて私たちを勇気づける。「人生には色々なことが起きる。でも、それに耐えていかなければ—いつも通り、動じないで進んでいかなければ」／「人生は自分でつくるもの。前進するんだ。振り返らないでね」(*Mousetrap*, 340, 323)。戦争中の暗い思い出やトラウマに満ちた世界から、キッチンで焦げたパイというありふれた日常に読者や観客の意識を巧みに戻して、クリスティーの物語は幕を閉じる。

注

- (1) アガサ・クリスティーの作品の邦題については、ハヤカワ書房の〈クリスティー文庫〉に準じた。なお、引用文の日本語訳についても同文庫の以下の本を参考にした。「三匹の盲目のねずみ」(『愛の探偵たち』所収 宇佐川晶子訳 2017年)、『ねずみとり』(鳴海四郎訳 2016年)、『スタイルズ荘の怪事件』(矢沢聖子訳 2021年)、『満潮に乗って』(恩地三保子訳 2004年)、『予告殺人』(羽田詩津子訳 2021年)、『葬儀を終えて』(加賀山卓朗訳 2021年)、『アガサ・クリスティー自伝 (上・下)』(乾信一郎訳 2009年)。
- (2) モールバラ・ハウスでご友人とこのラジオ劇を聞かれたメアリー皇太后は、この誕生日の贈り物に大変喜ばれたという。Robyns, 178.
- (3) 一番下の弟、フレディは別の家の里子になったため、二人の兄と共にゴフ夫妻の農場には送られなかった。
- (4) いずれの作品においても、農場主は逮捕された後に死亡したことになる。
- (5) 作品のタイトルにもなっている「三匹の盲目のねずみ」は、虐待の被害に遭った3人の子供であるとともに、この事件の「加害者」としてジム／ジョージが復讐を企てる3人の女性でもある。
- (6) イーナ・ツヴァイニガー・バルジェロウスカ (Ina Zweiniger-Bargielowska) の『イギリスにおける耐乏生活—配給・統制・消費 1939-1955年』(*Austerity in Britain: Rationing, Controls, and Consumption 1939-1955*) の第一章に詳しいが、イギリスで第二次世界大戦中に始まった配給制度は、アメリカに対する巨額の債務返済の影響により、戦後もしばらく続いた。1954年5月にチーズや油脂、7月にはベーコンや肉の配給が中止となり、10数年に及ぶ配給制度は幕を下ろした (Zweiniger-Bargielowska, 34-35)。

引用文献

- Birns, Nicholas, and Margaret Boe Birns. "Agatha Christie: Modern and Modernist." *The Cunning Craft: Original Essays on Detective Fiction and Contemporary Literary Theory*. Ed. Ronald G. Walker and June M. Frazer. Macomb: Western Illinois University, 1990. 120-134.
- Chandler, Raymond. "The Simple Art of Murder." *Pearls Are a Nuisance*. London: Penguin, 1964. 181-199.
- Christie, Agatha. *After the Funeral*. London: Harper Collins, 2014.

- _____. *An Autobiography*. London: Harper Collins, 2011.
- _____. *The Mousetrap and Selected Plays*. London: Harper Collins, 1994.
- _____. *A Murder Is Announced*. London: Harper Collins, 2022.
- _____. *The Mysterious Affair at Styles*. New York: Bantam Books, 1975.
- _____. *Taken at the Flood*. London: Harper Collins, 2015.
- _____. *Three Blind Mice and Other Stories*. New York: William Morrow, 2012.
- Dalrymple, Roger. "The Thrill When It Suddenly Went Pitch Black!": Blackout Cultures in *A Murder Is Announced* and *The Mousetrap*." *Agatha Christie Goes to War*. Ed. Rebecca Mills and J. C. Bernthal. New York: Routledge, 2020. 155-166.
- Green, Julius. *Agatha Christie: A Life in the Theatre*. New York: Harper Collins, 2015.
- _____. "A Worrying, Nerve-Wracked World": Agatha Christie's Emergence as a Playwright during and after the Second World War." *Agatha Christie Goes to War*. Ed. Rebecca Mills and J. C. Bernthal. New York: Routledge, 2020. 95-108.
- Mills, Rebecca. "Detecting the Blitz: Memory and Trauma in Christie's Postwar Writings." *Agatha Christie Goes to War*. Ed. Rebecca Mills and J. C. Bernthal. New York: Routledge, 2020. 137-154.
- _____. "England's Pockets: Objects of Anxiety in Christie's Post-War Novels." *The Ageless Agatha Christie: Essays on the Mysteries and the Legacy*. Ed. J. C. Bernthal. Jefferson, North Carolina: McFarland & Company, 2016. 29-44.
- Morgan, Janet. *Agatha Christie: A Biography*. London: Harper Collins, 2017.
- O'Neill, Terence. *Someone to Love Us*. London: Harper Collins, 2010.
- Robyns, Gwen. *The Mystery of Agatha Christie*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1979.
- Walter, Elizabeth. "The Case of the Escalating Sales." *Agatha Christie: First Lady of Crime*. Ed. H. R. F. Keating. New York: Pegasus Books, 2021. 5-16.
- Worsley, Lucy. *Agatha Christie: A Very Elusive Woman*. London: Hodder & Stoughton, 2022.
- Yiannitsaros, Christopher. "Displaced Persons: *A Murder Is Announced* and the Condition of Postwar England." *Agatha Christie Goes to War*. Ed. Rebecca Mills and J. C. Bernthal. New York: Routledge, 2020. 124-136.
- Zweiniger-Bargielowska, Ina. *Austerity in Britain: Rationing, Controls, and Consumption 1939-1955*. Oxford: Oxford UP, 2002.